113 遺念火の話

昔、この村にね、えらいこの、夫婦の、男女のね、愛が、大変よそから見ても素晴らしい愛をね、お互い愛しあっている仲をね、疑いをかけてね。この、いつも藍ね、着物を染める藍の、藍染めをしてね、いつも時間的に家内が帰ってくるのをいつもその夫がね、迎えに、ある一定の場所に迎えに行きよったと。

そして事実、心からの愛であるかどうかを確かめるためにね、変装をしてね、妻の心を試そうということでね、その時にはまあ、いたずら、今の痴漢ですね、痴漢みたいなことをやろうとね。この女は怒ってですね、髪に挿したジーファーというのがあるんですよ。髪挿し（簪）が。これで夫の喉を突いてね、殺してしまったと。そして、死んで。見たら自分の夫だったと。これで、自分も自殺をしてね。この愛がこっからあったんだと。

その遺念がね、いつもこういったような時間的に、夜になったらね、いつも付いたり離れたり付いたり離れたりをやりおるよ。

字糸満　野原由宗